

いまさら聞けない自然言語処理

金子 貴美

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 理学専攻 情報科学コース

kaneko.kimi@is.ocha.ac.jp

発表概要

北海道といえば、「少年よ、大志を抱け」と述べたクラーク博士が有名だったり、キャッチコピーが「試される大地」だったり、「夢」「希望」「挑戦」を彷彿とさせるものが何かと多い地であるように思われます。そのような夢と希望と挑戦の地・北海道で、我々学生が普段聞きたくても今更聞けない質問の数々を、第一線で活躍する先輩研究者にぶつけてみて、どのような答えが返ってきたか、また、それについてどう考えるかを報告します。

自然言語処理の世界には「80年代のアプローチは失敗に終わった」といった、先生方の会話でよく登場する言い伝えがあります。しかし、現在の大学院生は、主に80年代後半から90年代前半の生まれであり、想像が及ばないこともしばしばあります。そこで、今回は、たとえば以下のような、学生が恥ずかしくて聞けない質問を用意し、先輩方にお答え頂きました。「自然言語処理は進展しているのか、それとも停滞しているのか?」「進展しているとすると、10年前と何が変わったのか?」「停滞しているとすると、何が問題なのか?」「10年前、20年前に何を目指した結果として、今日の言語処理があるのか?」「80年代の記号論的アプローチでは何がいけなかったのか?」「機械学習による言語処理と、人間の言語処理の共通点・差異は?」

これらの問いとご回答から、次世代の自然言語の夢と希望を探りたいと思います。